

真宗保育の願うもの 大谷保育協会社団化の意味

社団法人大谷保育協会

研究部長 祖父江 文宏

真宗保育

(1)

1982. 7. 20

発行 社団法人・大谷保育協会
発行代表者 井伊 各 量

〒600

京都市下京区烏丸七条上ル
真宗大谷派宗務所
青少年部内(事務局)

TEL 075-371-9181
振替 京都 2-11705

◎保育協会の歴史を

支えてきたもの

保育協会の長い歴史は、「真宗保育」とは何かを問い続け、あきらかにしようとする願いの歴史であったと言えます。

歴史とは、いつもいかに生くべきかという問いに対して、かく生きたという最も現実的な部分においてのみ歴史たり得るのですから、「真宗保育」をあきらかにしようとする願いの歴史もまた、保育の現場で仕立てあげた問いに保育現場のなかで答えるという保育実践と、実践によって自らの生きざまを問うという、過去を受けつぎ、現在を生きたことで未来に関わっていく、最も現実的な歴史を受けつぐことであつたと言えます。

大谷保育協会が生き続けているのは、保育を人間として生きる場として関わり、保育者のひとりとしての私自身の生きる上での問題として問うという視点と姿勢を持ち続けているためなのです。

このことは教、育の体系のなかに組み込まれ、組み込まれることで概念として存在し続けている保育というものに、「真宗」という言葉をつけ加えることであきらかになるといった安易なものでなく、解つたつもりを廃して、できあがつたとされてきた概念としての保育そのものを疑い、問題とし続けているというところにあるのです。

それは、保育を自らが問われることのない単なる方法論から解放し、保育を自らの内にとり込むことで自らの生きる上の問題としてとらえることで人間の生存という、最も現実的な問題と直面する覚悟によってのみ可能な世界なのです。保育協会の歴史を支えるのは、真宗保育を問うことで保育に関わる自らを問う覚悟なのです。

◎観察記録の意味

人間は誰もが物と関わり、人間と関わり

ることで生きています。人間はそれぞれの関わりの中で生きていけると言えます。このことは、私たち保育者が子どもたちと関わり、関わった子どもを観るとき、その子どもの関わりだけを観ているにすぎないことを意味します。しかし、関わりが全てではありません。子どもにとっての欲求は、関わりを全的に統合した子ども全体を認めてほしいということにあるのに、私たちの目は表面的な関わりだけを見てしまうことになりがちです。

人間の成長や発達にとって大切な自分の世界を創り出す能力は、感情や情緒の安定を土台として創られていくものであると考えられますから関わりだけを問題としたとき、子どもが精神的安定や満足感を得られるはずがありません。

観察記録の運動は、関わりという一部分を通して子どもの実存をどこまで広く、深く観ることができか。その眼を養い、関わっている保育者自身も観ることで保育を観る眼を養っていくとするものです。

子どもにどう関わるかという方法論のためではなく、そう関わりを養うを得ない子どもの願いや哀しみを、保育者自身の問題としようとするのですし、また問題としきれない自分を見ずえることで保育そのものを見ずえたいこうとするのです。

保育協会の流れのなかで、この観察記録の運動が大切な役割をはたし続けてい

るのは、このためです。

◎保育協会社団化の意味

保育協会が社団法人格を得たのは昭和五十四年のことですが、社団化への働きはかなり以前からありました。それは、真宗保育を保育現場に立って考え続けてきたことの必然であったからだと言えます。

つまり、私たちが「真宗保育」と言うとき、既存の概念による保育に何かをつけ加えたり改良したりして成り立つものでなく、既存の保育そのものへの疑問を抱かざるを得なかったことによるからです。

①教育体系の自己矛盾

日本の公教育の普及は、世界的視野で見るとき、他に例を見ないほどの高率を示しています。そしてその高い普及率を支えてきたものは、教育の方法の統一と教育内容を知識の量へと転換したことによると考えられます。つまり、教育を人間の完成という目的の手段とすることで知識の教授という方法を生み出し、与えるべき知識の量でカリキュラムを組んできたのです。

教育とは、完成されたものから未完成なものに知識の量を与える作業となったのです。

この教育の在り方で問われるのは、教

授の技術であり、量をこなすことも能力です。そして効果としての獲得した知識の量です。

教育は、全的な人間の発達や成長に関わるのではなく、ごく狭い部分—知識の量—にのみ関わることで、こどもそのものを手段化するということになっていくのです。

教育を受ける側のこどもたちの能力は、教育効果に重要な意味を持つこととなります。教育効果をよりよくするためには、能力の均一化で集団をつくる必要があります。切り捨て、落ちこぼれが生まれ、切り捨て、落ちこぼれさせることでより効果的な、より質の高い集団を目指すこととなります。

日本における公教育の普及は、知識獲得の能力を計りとして、こどもたちの生命そのものを計ることになってきたのです。この日本の教育の持つ矛盾は、ひとり小学校以上の教育体系の矛盾に止まらず、教育体系のなかに組み込まれている保育そのものの問題でもあるのです。だからこそ、保育を問うことが教育を問うことにつながるのだと考えるのです。

②教育か共育か

既存の教育は、常により完成された者が、より未完成な者に知識を教授することで未完成な者をより完成に近づけていくという図式から離れられないのです。このことは、ついに達し得ないがために

理想であるという意味で、理想主義であると言えます。しかし、教育者もまた未完成な人間であり、人間の価値を計る尺度が存在しないという現実を見つめたとき、理想ほど人をシラケさせるものはないのです。

現実的な視点とは、教育者もまた未完成な人間です。人間そのものが未完成なるがゆえに人間なので、教育者も教育を受けるこどもたちと同じ人間としての基盤に立っているのを見ることでしょう。つまり、人間として立たしめている等価の生命を認めるということなのです。この等価な生命を認めあつたとき、教育するものとされるものという関係がくずれて、共に育てられるものという真宗の保育の世界が切めて開かれるのです。「保育者集団」というとき、そこに関わるすべての人を指すのも、このことによるのです。

③みんなのなかの私

人間は誰も他者とのつながりのなかで生きるものです。他者とのつながりは個が生きる上での大切な条件です。他者があるからこそ、個が生きられるのです。個は、他者によって生かされているのでしよう。保育者集団とは共に育てられている関係なのです。

集団と個は、矛盾するものではありません。一人が大切にされることが集団を大切にすることです。集団が生きる条

件なのです。集団は、個と同じように生きていくからこそ自らを社会に開いていくとするのですから、静止した形としてとらえることは生命を見ずして人間をとらえることと同じこととなります。

個とは人間です。人間とは、生まれた意味を自らに問うことで生きようとする人間です。つまり、つながった社会をとり込むことで問いを発見し、問いを問うことで思想を生み出し、社会に還元することで行為します。そして行為が社会からの評価を生み、評価を新たな問いとしてとり込みます。このとき、人間はあきらかに変わります。この変わったということが発達した、学習した証でしょう。

個が集団をとり込み、集団に還元することではじめて静止した集団を生かすため、社会化します。つまり、ひとりの問題をみんなの問題とするということです。なにものよりも重いひとりの生命を、平等の生命として問うということ。このことが静止した集団を生かすため、社会化します。

施設につながりを持つすべての人が、平等の生命を生かすことから保育者集団が生まれ、施設が機能し、施設自体を社会に開いていくのです。このことが真宗保育を公共性あるものに行っているのです。大谷保育協会が法人格を得た意味は、ここにあります。

(つづく)

振興部の課題

振興部長 五島 行宣

青少年教化については当派が仏教諸宗派に先がけて組織と活動を続けてきたが、特に親鸞聖人御遺志を機縁として全国的にその必要性が認められ、今日の充実発展をみるようになりました。

我が保育協会においても地域社会は勿論のこと、門弟子弟の保育に従事しつつ教職員の研修、園長・設置者と保護者と共に真宗保育の実績をあげてきました。また宗門においても青少年教化条例を制定し、組織が現代社会に応え得るように対処してきたのでした。

こうした中で、公教育をになう我らは真宗保育が宗派教育にとどまらず、広く社会に認められるものとするために、公の機関として責任を果たすことが要請されてきたのです。従って昭和五十四年九月を以て社団法人として認可され、国も真宗保育の公益性を認めることとなったのでした。しかしながら公益法人が独自に活動することなく、宗門にもこの目的を承諾してもらったため、度重なる審議の結果が青少年条例の一部改正によって、宗門と一体となって幼児保育の任にあたることとなったのでした。「大谷保育協

会に関する規程」の中で「保育協会は常に条例の本旨に則り、本派の青少年教化の方針に基づいて宗務の機関と緊密な連携を保ち、一体としてその機能を発揮するよう運営されなければならない」と定めることで、社団法人への協力と事務管掌をすることになったのでした。

以上のような経過の中で今日何が問題とされているかを考えると次の諸点があります。

一、全国に約八〇〇〇園近くある保育施設関係者が、全国加盟ができるよう促進すること。

二、公益法人たる資格と権利を行政機関たる都道府県に衆知せしめるように努め、社人になることにより宗教法人立施設は勿論のこと学校法人、社会福祉法人、個人、その他の法人で真宗保育が公に実践できる証拠となるよう努めること。

三、派内のみ情報把握にとどまらず、宗教関係団体をはじめ宗教関係保育団体、幼稚園保育園関係団体と緊密な連絡を保ち、対外的に活動できるように努力していくこと。

四、寺院の経営する保育施設が公益事業の目的を達するよう努めること。保育のみの場でなく家庭教育或いは個人のもつ悩み等をも解決していける機関となること。

五、幼稚園関係については、

(一) 宗教法人立、個人立として永続できる方策を考え、特に幼児出生減にともなう存続不安を解消するための公費助成の道を開く手立てを講ずること。

(二) 学校法人に指向する施設は、寄付行為を慎重に考慮し、真宗保育の実践に差しつかえないよう関係機関と折衝する。特に宗教法人役員会の承認を得て宗教的施設の確保に心がけること。

(三) 学校法人においても真宗保育がゆがめられることなく実践し、公費補助金（經常費）が拡充されるよう努めること。

六、保育園関係について

(一) 真宗保育が実践できるよう、各園の園則や定款に対し十分な配慮をばらうこと。

(二) 多くの施設を長い間提供してきたにもかかわらず、考朽化にともなう園舎新増改築の設備整備資金を補助されていないこと。社会福祉法人と差別の取り扱いを受けている点を法改正等になるような方策を考えること。

(三) 理事長、園長の兼任が許されない中で、後継者育成を考慮しながら職務の制度化改正につとめること。

七、私学と民間の建学の精神を十分に発

揮し、夫々が私立幼・保団体及び仏教保育団体等に加盟し、日本の仏教保育を推進し協力していくこと。

以上の通りですが、その他、融資や年金を含めた共済制度の確立、同じ真宗保育をめざすものによる総合学園設立への志向等をも進めていかなければならないでしょう。

最後に当面する問題を一、二、指摘して参考に供したいと思えます。

その一つは、公益法人に対する収益事業の法人税基本通達の一部が改正されたことです。関係諸団体が交渉にあたっているのですが、法人の業務が正しく執行されているかを夫々がチェックする必要がでてきているということですが。

第二に、私立学校振興助成法の一部改正がほぼなされるであろう時にあたって、学校法人化を指向している園へ付帯条件が付き、法人化へ努力している報告の業務化や、期限切れによる厳格なる調査と報告が行われることとなります。これにより、都道府県による設立認可基準の条件緩和が厳しく取扱われる傾向にあるため、慎重に関係機関と対応していかれるように望まれます。

第三に、自民党において幼保問題を考える乳幼児保育の基本構想が、幼児教育および保育問題小委員会で検討されることとなりました。この点に強い関心と真宗保育としての提言をしていくことが大切であると考えます。

ながい冬が去り、晴れた日が訪れた。土手のところどころになお残雪がある。あたたかな土の匂いがあたりをつつんでいる。

こどもがふと、頓狂な声を出した。「見つけた、見つけた。春、みつけた」残雪の割れ目から小さいな顔を出しているみどりの芽を指さした。「生きていた。つめたい、重い雪の下で。つよいいのちだ」

そのちいさな手は、やわらかな土と、みどりのふきのとうを、いつくしむかのように触れている。

春光に輝くこの土手の前方は日本海である。

親鸞聖人のご流罪の地、越後居多の浜は、すぐ近くである。聖人は北国の自然のきびしさの中で、永い歳月をかけて流人の身としてこの海をみつづけられた。自然にひそむまことなるもののいのちの存在を発見された。

地上に生きとし生けるもののいのちはすべて平等であることを実証された。いのちはあらゆるもののいのちのかかわりなかで願い

がわれていることも。そしてこのいのちは愛するもののために自由にのびのびと、時にはたくましくも剛く生きぬく力をもっていることを。

しかし人間はいのちを自分だけの所有物としてきた。自分のしあわせと満足の眼からいのちをみつめ、愛しているのである。それだけに執着し、自己じしんの独占的に所有物化としての存在にして

海は語る

——いのちのはげみ——

大谷保育協会 理事 井伊 各量

しまった。

我愛であり、無明である。人間に生まれてきた事実を忘却し、いのちのかかわりあう尊厳の力をみうしなった。享楽に酔い名利に惑う現代人となった。

しかもなお幼子までもこの混濁のげんじつの渦の中に陥れようとしている。

真宗保育は聖人の教えと共に生

き歩みつづける、まことの保育道である。公共性に根ざしたこの一道を遅々としながらも、人びとと共に道交しようとしてきた。公共とは我執を超え、人間平等のいのちの希いに生きることである。

いま意をあらたにして、このいのちの平等と尊厳なる光をみつめ、人をして人間たらしめる保育のために、その願いに生きつづけることに歩を進めることにした。

海は今、平穏である。せいせいとして涯しなく広い。聖人は苦悩する一切のものを撰取する慈悲として群生海と名のられた。

広大ないのちのはたらきとして本願海と仰がれた。

いまここに、いのちとはなにか。いのちは何を呼びかけているか。このきびしい問いかけは現代に生きるものものへの警鐘である。

いのちの願いのままにその九十年の生涯を大悲のなかに閉じられた聖人である。跪きてそのみ声を、寂かにも確かに仰ぎつづけたい念や切である。

母と子の対話を求めて

東本願寺絵本シリーズ
6-9才向 しんらんさま 600円
6-9才向 おしやかさま 600円
え/加藤義明
6-9才向 れんによさま 600円
未刊 え/水野二郎
1-5才向 ててて 350円
え/よしもとたかこ
1-5才向 おやすみなさい 350円
未刊 え/祖父江文宏



1-5才向 いきるってなめに 350円
未刊 え/祖父江文宏
ジャータカ物語Ⅰ 小学生向 かんしやく持ちのまま 580円
え/渡辺愛子
ジャータカ物語Ⅰ 小学生向 音楽師グッティラ 580円
未刊 え/渡辺愛子
ジャータカ物語Ⅰ 小学生向 月のうさぎ 580円
未刊 え/渡辺愛子
劇画 手塚治虫プロダクション 一向一揆(仮称) 未定

東本願寺出版部

〒600 京都市下京区烏丸七条上ル ☎075-371-9181 振替京都0-27404